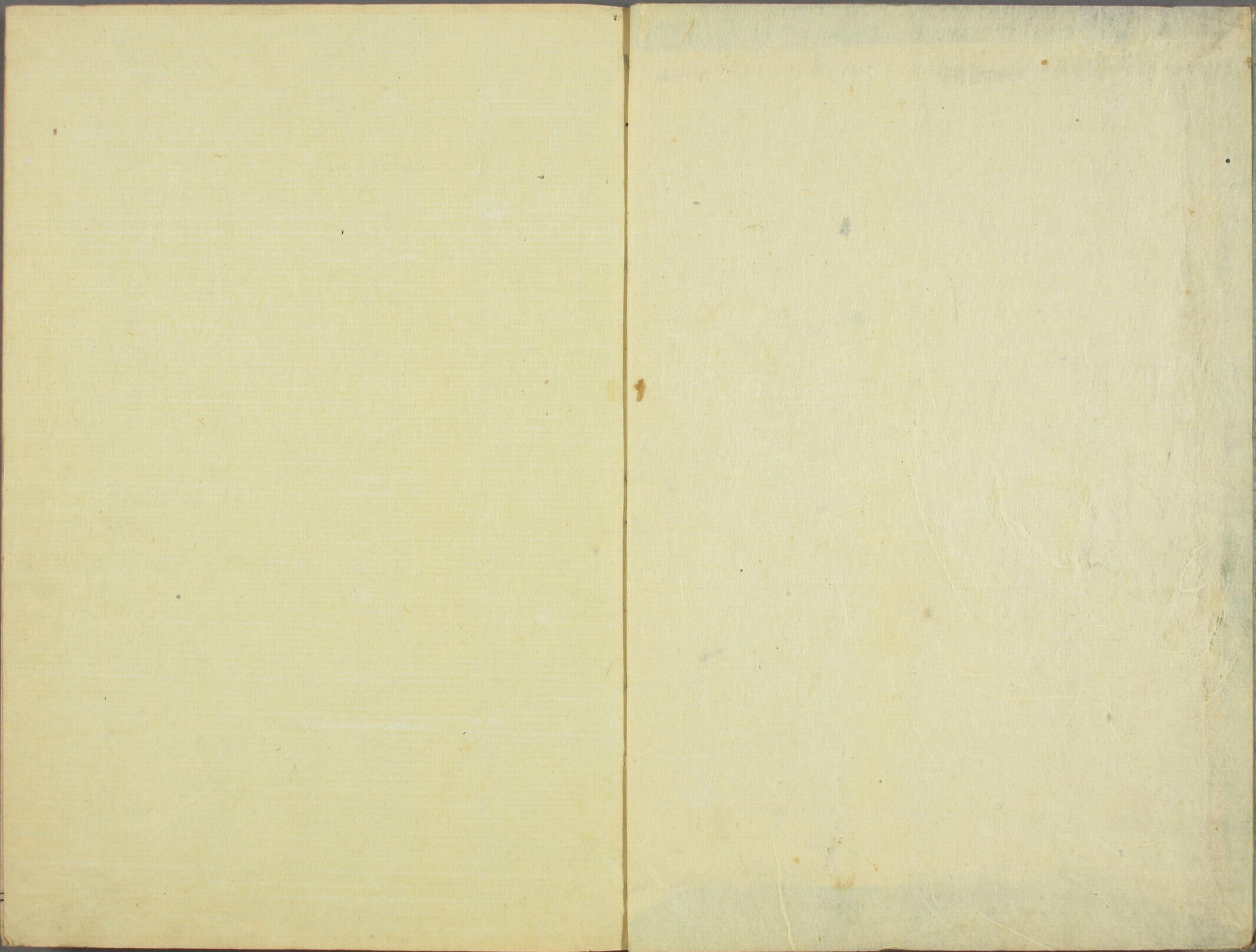


源氏物語序文

序文
總論上
首上

7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6 6 5 4 3 2 1





もとあきけは山半住ふよ
所なれをもそへうて水の
れぬじきじたわよこをうえ
といふと遠くいひじゆす
ゆくもやう年うひまう生

まよひ者人乃へるばにんと
つるおもむりあはれしと
ゆゑまはえふとあら
はのせは正直まのよを鋤
力をもててひづとなす長押攘

ほく國かどよりおもひがゆ
まよひそりうきりれ世大
ひよゆき先うやくから
にてかの田町を一歩するゆく
おもひ取しあるたびにまよ

先君は何ん所のやうなふにそ
ひしきう思ひだじ。松本は
え大きといまゆるうち入るに、
ゆもあらまかくもあらうが
すまし也と自説をばりほゑ

お匠のいろをよむ處をあるま
かあるまう人、余大年を
いじらしむる(たがしい)事
いとぞや文もうう
いとぞや文もうう

少ふ大學の君があつて、の
ぞいよもつうだれ廣道う
うすに縄墨かへりう
とよまとと幸えひめし
初所のあとゆれタ派達の

大塚 小ちうてーはま

久貞因幡守正典朝臣

詵善堂主人

むうれ物處ある今世をすれども
こそ此おほき事にの原故也ゆすり
ちつてあつた、あはれとよせゆす
人まことにあらゆるやうをかほり
もよなみのうきよやうをかほり
へ今ゆく事をかほりかゆき
まことにあらゆるよたててそのうれ

みやひとをよしとんよとひよもゆく
うふもおのちんとよむゆきよもゆくの
ね度よとよきて、ハヤシカわすらけよと
志けふの東に、アヒルが寝てゐる
アヒルもトトロも、池のほとりに花の
なまけうるぬれやくとなんざの上人
まものゆきよまくいふておもひゆすり

いとおもてくわくの事はよもろよもを
ゆきやう先をよいひよきてとぞれの
きれむちうともかくふたおよしるふ
せんならぬうつわなんじゆくらむだくは
せんのゆくつめゆつあきうけふす
きまよみゆくわくとくにむきくせん
かくあくきふくくくくくくくくくく

なあくじよのきあくまんぢくじくより
このねつうよくうめでくうううう
ゆくあくよくとくとくとくとくとくとくとく
あくよくよくのきくよくよくよくよくよく
のこせんくよくよくよくよくよくよくよく
あくよくよくよくよくよくよくよくよくよく
まくよくよくよくよくよくよくよくよくよく

なよめとまつよみかねてなんの
もいのむれ月よきくにさうもくと
まれおひらてゆすらひよ、とれぬもの
からくはまのまなみをくふとんをと
ほくとあそぶがよあせよくりく
くわくすくくわほるよなを、
ほくよがくふくわちうとく

われまくらすまくらすくわくわ
やくまくらすまくらすくわくわ
ゆくまくらすまくらすくわくわ
さくまくらすまくらすくわくわ
らくまくらすまくらすくわくわ
てねよあそぶとくわくわくわ

はよよよかなといひへかいやすあらきと
まゐりとせまくすのあまくつしま
さゑひの色あかくわにたれすまよ
幸と、駒やぬほをよのわ浅へとせし
ちふみと、あらきむちうのま
ひよくふねいきのまの
きよかくすみくとおぼう

うきのゆよめくのやくよめ
ひあうねせんまのゆよめ
ひそおだくわくわくもくわくま
えよぢれよきりくわくま
まくわくといとわくあくわくま
なけくわくまかいくわくま

ほゞまちとくわくおほやまとあると
ちうもすほくすもをうるるもとも
うりぬはうちとくべきとつまむれ
ゑん人ゆくよすがわくよく

嘉永七年正月二日

萩原廣道

校正譯注源氏物語評釋首卷目錄

懇論上

- | | |
|----------------------|---|
| 一 源氏物語といふ題号の事 | 一 |
| 一 紫式部の事并日本紀の御局比事 | 二 |
| 一 時世のけりまあれ事 | 三 |
| 一 此物語称譽の事 | 四 |
| 一 此物語比歌の事 | 五 |
| 一 作者の用意け事 | 六 |
| 一 物語け心を并ねのあられを知るといふ事 | 七 |
| 一 部の大事といふ事 | 八 |
| 一 此物語注釋どもの事 | 九 |

懇論下

- 一 引歌の事 四十五丁
- 一 准據の事 四十六丁
- 一 卷々の名どもれ事 同
- 一 人々の名比事 四十八丁
- 一 紀年シダテの事 五十二丁
- 一 系圖の事 五十三丁
- 一 此物語小種々の法則ある事 五十六丁
- 一 をりのうとす所比事 六十八丁
- 一 頭書評釋凡例 七十六丁
- 一 本文譯注凡例 已上

校正譯注源氏物語評釋首卷

萩原廣道著

惣論上

源氏物語といふ題号の事

源氏物語といふ名の事アリ。居翁の云、大さきの物語の例。
 オヤハシマサヒヨウ主としていふ人の名をもてほきり。此後もこのでうふ。
 光源氏の本をひそかにうけるが、源氏のねぐらとへりあう。
 拙傳の名、光源氏のねぐらといふ。さて源氏物語とへりべくよあいだ。とりよ
 あひごとくとくべし。此説のごとく。さて源氏は事ハ、岡部翁の源氏新編より。
 國史より新撰姓氏錄から成案す。嵯峨天皇弘仁五年より宣祖信公以下男
 女八人アリ。始て源朝臣の姓氏を承り。左京より其子小氏賜

もとより源氏たり。諸抄小。此時三十餘人よ始て源氏を號す。といひハ委シが
らば。ハジメハ人より次々小二十餘人ふるをも。あり。といひれる。うごと。源字の
事ハ舊說小。濫觴小水爲九河之源。の義小祝して用るあり。とあり。今案小。伊藤
長胤が秉燭譚云。北魏の時。源賀小始めく源姓を継ぐ。源賀ハ本魏の皇族よ。く。
源を同じうむと因て。始めて源姓を継ぐ。源賀が傳すあり。本朝小ても源氏ハ
皆皇族トナリ出。同一義なり。と。り。がの國北史を考る。小。大。此事あり。て。
源賀。禾。髮。儻。檀。之子也云。太武謂曰。卿與朕同源。因事分姓。今可爲源氏。と。り。く。
さき。バ舊說ハいづれある。故源氏を。バ。持。小
太。く。ハ。長。胤。が。い。づ。れ。ご。と。く。同。源。の。義。ふ。く。初。す。あ。べ。一。する。故。小。源。氏。を。バ。持。小
重。く。う。あ。り。く。皇子の。氏。も。持。る。例。と。ハ。な。り。ふ。く。ん。ざ。で。御。縉。と。り。あ。り。ハ
玉。小。指。よ。云。中。む。し。一。せ。び。と。ね。縉。と。り。ひ。く。一。く。み。の。あ。り。御。縉。と。ハ。今。の。セ。小
ち。あ。ー。と。り。ひ。く。と。よ。く。生。れ。ま。ち。る。を。か。ー。日本紀。小。談。と。り。モ。ジ。字。を。ど。か。のが
ト。訓。の。と。書。小。名。づ。け。と。作。き。る。と。ハ。説。合。美。ふ。ね。縉。の。り。で。た。ち。が
め
の。お。や。あ。る。井。取。翁。ふ。く。ほ。の。と。う。ぎ。を。合。せ。く。と。あ。き。べ。此。井。取。や。ち。先
な。り。く。ん。そ。の。ね。後。く。う。り。う。の。代。小。け。く。ま。う。と。ん。ち。く。み。を。福。ど。も。い。く。く。う。に。ね。と
え。を。ど。延。き。あ。ど。よ。か。は。こ。な。れ。あ。と。ぞ。か。く。く。る。う。く。ま。で。も。ほ。く。く。の。物。た。の
さ。は。お。の。く。す。く。づ。か。く。く。ま。ま。く。な。れ。ど。も。い。づ。き。も。考。れ。せ。ふ。く。く。ま
く。か。る。よ。く。ふ。て。う。と。い。く。う。か。く。ら。ま。く。ま。を。よ。う。ど。と。く。ふ。て。ほ。く。う。う
て。と。う。た。あ。と。ち。や。を。か。く。ー。き。ー。う。り。て。か。き。あ。と。み。れ。が。く。假。り。り。ー。
ス。ま。も。よ。ハ。み。ー。事。を。と。の。ま。く。小。ま。る。も。く。や。う。く。あ。る。中。小。ま。ぐ。ま。く。く
作。す。う。う。の。く。う。く。が。く。て。い。だ。き。の。ね。語。も。男。女。の。あ。く。く。い。の。の。と。む。神。と
お。や。く。お。く。く。よ。く。れ。す。の。集。せ。あ。も。お。の。お。れ。ま。ま。と。同。ド。こ。と。う。り。く。て。
人。の。情。せ。あ。く。か。く。く。と。お。よ。や。く。く。と。な。れ。が。あ。り。と。い。い。ま。き。と。れ。が。ど。じ。
な。む。お。ま。を。か。く。く。か。う。だ。

紫式部の事并日本紀の書局

〇二

あのね徳はくまう人の紫式部あるとハ、子孫ミダラゴトかける日記ミダラホネからミダラホネを。勅ミダラコトくみミダラコトた。あの伝あるふつた。昔よミダラコトさうがくの説ミダラコトどもあれど、いづまくと後よミダラコトうがくもうていてる妄説ミダラコトあると。紫家七論、源注拾遺玉、小櫛などよあくミダラコトいもすミダラコトれど、ふハ省く。妄説ミダラコトと、ふそくば。皆無用イタツラある。漏ミダラコトあれば。さて御ミダラコトぬーの系図ハ、舊注ミダラコトども小々ミダラコトゆ。安藤為章の世宗家セ論あるハ、はよ委ミダラコトく考へる。父ハ正四位下、越前守、藤原鳥時、朝臣とて、閑院左大臣冬嗣公の子、贈太政大臣良門公より四世の孫あり。母、常陸介藤原爲信朝長の女夫ハ左衛門權、佐藤原宣孝、朝臣とて、良門公の五世ミダラコト孫とて、勅修寺家ミダラコトは祖なり。さて宣孝、乾也ミダラコトの北方ウツシマとおりて、大貳ミダラコト三位ミダラコト賢子ミダラコト名ミダラコト不ミダラコトと。傳ミダラコト不ミダラコトと。産て後、長保三年四月小宣孝卒ミダラコト。四五年ミダラコトぞうりやりめびとく。寛弘二三年の比より、上東門院へえづくよ出れるをあます。また此物

似ミダラコトくるハ、そのやうめずミダラコトのむだある。また半ミダラコト。また萬壽二年ミダラコトの比まで、存生ミダラコトて、上東門院小仕ミダラコト。しよああくうミダラコトた。またかの七論ミダラコトへきミダラコトに及ミダラコトべミダラコト。此人実の名ハ傳ミダラコト。紫式部ミダラコトといふハ、いわゆる呼名ミダラコトを。また、小柿ミダラコトといふ者ミダラコトと。さて紫式部ミダラコトといふ名ふつた。説ミダラコトも多うかよ。河海抄ミダラコトが、そのうへ手ミダラコトをすぐれてうにゆるをよ。藤式部ミダラコトの名をあくまで、紫式部ミダラコトと号せられたりとある。七論又源注拾遺玉ミダラコトとふぶられ。玉小柿ミダラコト、袋草紙ミダラコト、條院の侍乳母の子なり。もう一つして上東門院小室ミダラコト。もとく、かがやうミダラコトのもれ、じよきとおがく。とやく、めぐらす。また、此名ミダラコトある。また、其の名の義ミダラコトとある。はとくれど、この二つをおりかふらぬのである。また、紫式部ミダラコト日記ミダラコト、左衛門ミダラコト。あれミダラコトと。あめこくうミダラコト。また、汝氏ミダラコトふるべん人ミダラコトとある。小かのうへまいていづぐりのうりへとすみすみミダラコト。とあると、いだきのうりで、英、冲焉

章ハ、こゝよりよきて、うの山海説は澄とせまつて、体が極み、やうりの説
ふうち附ハ、坐とり名うむ坐下、あづくね半あきと、それとよそへく
のまゆへとぞ鳥ある。すべてこれらが、うねくをあづくふよそへて、
をも、鳥とくをなまく。とくに、今案小まづ河海は、藤式紙をあ
らうあて、紫式紙と号せられたりとあるハ、上東門院の号一とるす。まづ
を人の号一とるす。この事と、ようハ、上東門院の号一とくとりや
うふすゆとが、まゆあくべ。これハ、誤なべ。大々この呼名ハ、式紙また
侍従少納言などり、類タガと、さうむほに、半ハナよりて、ハ主ヒトよりも被
ざまきかんを、その上に冠カブし、紫・和泉などり、敷ヒト。皆他より呼ヨビたる
名とまへり。此人もそのもじめハ、に佑後清か國シマツクニなどりとく。モ氏ヒト不よ
アシく、藤式紙とぞ、うとつまづ。こまきとおもちその呼名ヨビナを。此地唐
作アシく後ふ他、とう称ホく掌ハシとが、まゆをつんとぞ、やだや。りへこの

公任卿のまゆを追スルまゆとやこの始ハシまん。よーとくとも、他のつやを
叫スルるが、ゆれく弘ハラれむか、へし。やまかハ、が一聲、上の手本ハンドとぞ、くきてま
くるゆゑよりて、叫スルる名を知ルべし。我身ワタシやうてせ、と、小擬コノミへとまゆが
ごとくのなまハが、用意スルる人あくハ、必辭ハサウエべき本ハシマ。一條院
の清乳母子故ハシマを、もうわづけスルまゆハシマ。これハ、ほふりと見スルとぞ、あれ。
うあくばイタ甚く辞ハサウエひあるべし。決ハシマ。うのうへ帝ミカドハ、わうりの者たうとのまゆ
とも、上東門院のそれをやぐて、声ハシマくめ、使ひまふ女房の名ハシマもや
めりんも、いうべし。まゆあくまゆ、せんのあくまゆ。世人のあく呼んハシマむか、と見スルまゆ
きバ、おさへりまハシマく、さうじもく。さうじもく、藤式紙とのこと、を。友
と、些ハシマと、あくもあれ。ばくく、小ぢよせく。他とう呼スルと、ばくくかく。友
はくく、あくもあれ。ばくく、小ぢよせく。他とう呼スルと、ばくくかく。友
おのづく、友式紙のうとまゆれて、まゆせんのうとまゆハシマく。あくまゆハシマく。

小櫛ふ。あられどハあくね半をうづうにとへそりかとて奥アキ
まかまじのまきのう。かくよウタる「」と。實初より此人小紫とりふ称
あくね。此おほよ紫の上の半と。さくはんていひや。ハモベくもあくね。
り。まくねバ。あらかやうてそれな。す。あらかやうて。よゆで。まくねバ。されぞ
於紫の上の半と。す。ぐれていひや。かまくね。あふ他より。ちへて紫が半と
つ。アカハシ。おだゆるな。紫の上の半ハ。がふもす。まくね。みじくかれ
くふこのおほを。たやく紫のおほを。更科日記よハタ。されば。葵冲の元代
ごとく。呼名の。おこつも。まくね。因る。と。大々。まくね。ぞねば。まくね
袋草紙の一説。小。若紫の半と。甚深あるがよ。此名を得。と。あるハ。
先まの。れぞう。ごとく。びざと。な。べ。ごもく。かくやうの半ハ。今と
なう。ハ。よくも。まくね。半。あ。ふ。く。かく。おと。ち。まくね。例證も。た。う。た
こと。ある。實。す。い。う。あ。ま。あ。く。ん。く。の。事。情。を。あ。て。かく。う。め。よ

り。ひまざむ。う。か。ま。ぎ。バ。い。ま。う。か。う。く。あ。る。が。ん。ん。擇。び。と。く。の。じ。
ま。て。つ。の。で。ふ。い。も。ま。い。く。ハ。か。の。紫。式。教。日。記。ハ。ま。る。もの。内。付。と。し。よ。人。付。り
云。く。う。ち。の。う。源。氏。の。ね。ぞ。う。く。よ。よ。ま。せ。ま。ひ。つ。き。く。め。く。る。く。の。
人。ハ。日。本。紀。を。う。そ。と。よ。み。お。う。く。ま。す。ま。と。お。が。く。る。あ。く。べ。ー。と。の。こ。ま。も。勢
ぐ。り。強。か。と。お。ー。と。う。わ。か。い。く。う。だ。ん。ざ。わ。【】ある。と。歴。よ。人。あ。ど。よ。り。ひ
う。く。して。日。本。紀。の。序。ほ。が。か。と。ぞ。ほ。け。く。う。く。る。い。と。と。く。く。ぞ。付。る。く。く。
とい。ふ。と。あり。こ。き。よ。つ。て。藤。井。氏。の。日本。紀。御。局。考。とい。す。の。一。卷。あり。
其。が。あ。れ。た。ハ。この。日本。紀。と。ある。ハ。日本。後。紀。續。日本。後。紀。と。さ。う。て。の。ま。る。よ
を。し。ひ。く。書。紀。よ。續。後。紀。ま。での。四。あ。く。ハ。國。名。あ。ま。バ。答。ハ。國。史。の。半。を
日。本。紀。とい。ひ。つ。ん。よ。を。論。し。ひ。と。源。氏。君。を。羞。威。天。皇。小。准。【タガニ】。よ。り。
次。小。半。半。の。人。と。や。無。の。人。よ。ど。ひ。あ。く。る。准。據。を。考。く。日本。紀。を。よ。く。讀。く
よ。う。を。の。ま。る。や。く。ふ。い。れ。う。然。ま。ど。も。此。所。の。文。本。ふ。よ。う。て。対。向。

あるをかの傳局考すも。日本紀をとてトナリ。ベキモ。とて。御事アリ。さ
るキモ有レハヤ。カヘキハキシム。古ヘタキト。あるをタク。帝より。武教を。
給。とハ。の。ま。か。ベ。又。給。と。お。が。う。ふ。つ。ナ。く。り。お。か。く。と。ハ。語。格。の。自
他。も。ダ。キ。バ。誤。な。う。と。カ。ミ。と。改。め。れ。る。う。そ。ハ。ち。く。ね。ど。と。ト。ナ。レ。る。ベ。ク。れ。
い。ひ。て。ベ。ダ。モ。あ。る。ベ。ー。と。シ。カ。が。け。合。ね。ぐ。と。し。』。既。小。讀。し。る。を。あ。れ。バ。『
と。ま。を。う。か。く。り。と。ま。う。み。だ。ベ。ー。』。推。量。す。う。る。き。く。と。て。俗。言。み。が。く。が
アル。デ。アラウ。と。リ。ア。シ。ト。と。ハ。次。の。視。よ。が。く。く。う。少。シ。ナ。ド。う。な。ん。ザ。る。あれ。
ギ。ハ。行。ア。ム。ナ。リ。と。後。上。人。お。ど。ふ。り。ひ。ち。く。と。と。あ。る。よ。か。の。モ。ベ。タ。る。ハ。ま。と
と。ふ。ざ。る。あ。る。ベ。ー。と。の。ま。シ。ム。と。い。レ。ジ。ダ。モ。あ。る。と。リ。モ。ル。ハ。シ。マ。ツ。ム。
の。う。ふ。き。ア。ム。モ。ふ。く。事。の。す。ぐ。ハ。回。ト。ク。レ。バ。『。モ。ダ。ラ。ク。キ。モ。グ。ト。る。』。あ。く。れ。レ。『
案。カ。小。説。』。の。ふ。カ。ド。ハ。そ。て。か。ね。が。考。例。と。り。と。此。物。原。の。古。き。写。キ。ど。も
小。説。モ。ア。シ。キ。ハ。添。ス。ル。ハ。モ。カ。ル。され。バ。ア。シ。キ。ア。シ。キ。ベ。タ。キ。』。と。と。モ。モ。ベ。ク。れ。モ。ベ。シ。

帝より。式部。を。給。か。と。の。ま。ち。ん。と。ハ。後。世。モ。ハ。あ。り。け。ふ。も。あ。た。半。れ
や。う。な。き。じ。と。世。が。ぬ。の。視。よ。ハ。キ。る。ほ。ど。も。お。傳。の。や。か。も。これ。れ。カ。レ。と
き。ジ。バ。これ。を。モ。ト。特。モ。ベ。キ。モ。あ。リ。ベ。カ。ム。言。の。シ。ロ。共。人。ハ。日。本。紀。を。读。
ベ。ー。ナ。レ。バ。モ。ア。ト。不。学。問。あ。リ。ベ。ー。と。の。ま。シ。ム。と。ハ。例。の。学。才。オ。ガ。リ。ハ。ト。
今。世。モ。学。問。と。リ。ア。リ。ア。リ。ベ。ー。ハ。今。ト。ナ。後。出。ア。リ。と。リ。モ。シ。ム。ベ。ク。れ。モ。ベ。
モ。共。よ。ま。を。う。け。く。リ。モ。辞。と。て。ア。リ。ベ。ー。と。モ。ア。シ。タ。萬。門。内。侍。の。い。モ。ベ。ー。
學。問。あ。つ。と。の。ま。キ。ハ。や。う。に。い。モ。ア。ベ。テ。後。上。人。お。ど。ふ。り。ひ。ち。く。と。ハ。
る。お。べ。名。は。け。る。モ。や。う。に。い。モ。ア。ベ。テ。不。可。ヒ。ナ。ム。ベ。ー。カ。ム。ん。ざ。モ。ベ。車。の。モ。後
す。ア。リ。ベ。ー。され。モ。日。本。紀。と。ア。リ。本。書。紀。の。こ。か。れ。ア。リ。ベ。モ。ベ。テ。園。史。と
日。本。紀。と。リ。ヒ。ア。リ。ア。リ。や。う。に。い。モ。ア。ベ。ベ。事。が。く。實。少。シ。モ。ア。リ。ベ。モ。ベ。や
る。この。論。も。う。た。ム。ア。キ。バ。モ。ア。ム。ハ。い。レ。ア。リ。例。の。人。モ。ア。テ。よ。そ。て
か。く。日。本。紀。の。傳。局。と。考。す。も。モ。世。よ。人の。行。シ。カ。フ。ア。ク。ン。ア。リ。モ。

おりべー。れ他ふもどくす。

時世のありき事

此物語をよきんよ、まづや財をのりきまと、よくくらひにまへて、
説べ。御みせば事のまより、違ひありく。後をのりて、ハ、ひ
惑ちるゝ事多くして、うあくおもむて、からうべ。時世と、ハ、此お説
作みる一條院の帝代、長保の末寛弘の始。紫式部寡モメ、小て里サト、よ住ス。間
よがましるゝハ、大さ、遠タガす。おぢやるに、物産のよす。芳のせよ、
事のやうよハ虫のぐきるのく。さての事はあくす。そぞよあり
しゆりかたすて、あまて、とく。とく。それバ、作者の左世シラセを、ぞぞりて
あねびきとく。そおあくす。先我大御國ガオホミクニ、カミツヨ。
神武天皇、大和の権原カヒラ、オホミヤ、大宮タテを建て、天下をあらへ、
附。神代カミヨあぐれ

御制度のまゝ小何事ともおきて、おうとく。小との制度れありす。すら
大き今世の侍制度シサタメ、小ちく、朝廷ミカド小仕サカナへまつを伴造トモミサ。諸國トコロにて地トコロ
を國造クニイサといひく。やのく、生きあぐふて、其家を繼シテ、其職シテをも繼シテ、幾イレせ
あれども遷タハ一変カヘらむ。なううカヘを。これうのよけ委シタマ。上古政述考カミツヨ、
拂タハ小。あらうの冠位儀禮サダメを摸タハらひ。孝德天皇の侍世ミカド、この
郡縣の制度サタメを摸タハらひ。後ハ、そのすあいく、變カハて、大さくわらうタハす。
ぞなうふ。令格式シサクシの委シタマ。日本紀シタマ。そのあるやうハ、日本を六十餘國サタと制め。
朝廷ミカドの下小郡ホリを置サト。郡の下ムラを置サト。その下ムラ吏シキを置サト。
朝廷ミカドよハ、の官サカナを制め。萬の手シテを取ル所シテを置サト。各其吏シキを置サト。
じめうひ。その官サカナ位シタマの階シタマ。又その官サカナ位シタマ、位田職田シテとて官
位の禄シテあり。かくて朝廷ミカドも、仕奉シテ人ヒトも、其官サカナ位シタマを賜タハて、次第小
高タカ階シタマも、昇タハゆく。ふまど、官サカナ位シタマ人の一世シテだシテふして、家シテ世シテり

てハ傳ツタヘ御制度サダメなり。ちく國クニの司ツガハ京ミヤコより出て年リを限スル。うそと
移シカろひこりつて、國クニを治ムスメトあわせん。是コレもあら受領スル。郡領コリツよ
モ已下シモツカタの吏ヒハ大カきその國クニ造ツカラ縣主アガタヌシ。あとのなまナマもあつて、る。まきも
年限リミテをきさん。されども、糸モトヨリをわよ住ムスメ。人ヒトあまバ。後アフタはをくや、職ツバを能シカる
さああり。また、巴ヒと車カと吏ヒあぐムも威權イキホヒハ、こゝにあたす。どり、あり。
大カきかくめカクメに御制度サダメ小ハあり。一ヒくど。我アガ皇國ミンクニハ神世ミツシテよりくわらう。
氏姓ウヂカジネを重シカく。家系イエスナをいひく。貴タカき賤シカシきをもつ。國風クニツリをうば。
その御制度サダメハ御制度サダメとスル。やうしよううひやれタマ。此一條院天皇は
御世ヒトドリの役ハシゴとあくまでりて、其職ハシゴは任せスル。家ハシゴも、大カき室ヒコも、
びとくハシゴも、一ヒくハシゴ。でも官位ハシゴハ一世ヒトドリの御制ミサダあるうシカ。や、发位ハシゴ
つねくハシゴ禄ハシゴ。また一世ヒトドリあり。また、巴ヒ世嗣ヨツギのうをく財ハシゴ。い
く困コウぞべきハシゴもあらず。私ハシゴ小田ハシゴを買スル。家のハシゴときハシゴ。是

を庄園ハシゴあぐムり。今世ヒトドリも某庄ハシゴといふ名ハシゴの。ふく小遣ハシゴするハ。ほんの庄ハシゴとあ
多くハシゴ所ハシゴ少シカく。皆私ハシゴの領所ハシゴ跡ハシゴなり。源氏君ハシゴの湊唐ハシゴ。八宮ハシゴの宇治ハシゴなども。
その領所ハシゴをくハシゴも、かくハシゴ。がくハシゴ。光景アリサ、アリサハシゴ。帝ミカトの御子ミコともうせ
ども。さるハシゴ御後見ミウシロミをあぐムのあくハシゴ。ハハシゴと貪ハシゴ。くハシゴして、人ヒトがハシゴあんせん
あくハシゴも。おとハシゴ。半ハシゴ。常陸ハシゴの椎原ハシゴ。宇治ハシゴの八ハシゴ。あぐムのはくハシゴすハシゴて、うづハシゴ。し
さて官位ハシゴよ昇ハシゴ。もともと、生ハシゴた家ハシゴ小生ハシゴ。その父祖ハシゴ。庇陰カゲ。よりく。
最初ハジメよりさるハシゴに官位ハシゴも。つたもハシゴとあくハシゴ。地下ハシゴとりより下ハシゴある
人ハシゴやうの憑タタキも。あくハシゴ。巴ヒと小權威イキホヒある人の家ハシゴ。私ハシゴのよを仕ハシゴ
て。其ハシゴ勞ハシゴをも。朝廷ミカド小ハシゴつハシゴすハシゴ。ばた種子タハニ。とスル。官位ハシゴをも申ハシゴ。後アフタ、
までもうかの庇陰カゲよよりて。高ハシゴ階ハシゴ。みも昇ハシゴ。あくハシゴ。まくハシゴ。されば朝廷ミカド
の御臣ハシゴとも。權威イキホヒある家のハシゴ。ともかまぬハシゴ。あくハシゴ。ども。ナハシゴ。此コレの
うち小ハシゴても。京本ハシゴの紀伊守タケルの惟光ハシゴあくハシゴの人ヒト。皆ハシゴあう。これ上古カミツヨ小

も今世みも。絶てあを半生あをバ。その勞ひいづくえあり半と、もぢわ。
 わたかべー。また住所のすも左京右京のうちふ。室まつ宅地を賜り。やう
 ふはくへきど。おれをあどみのきあふて。あら嚴うかる半ともゆうて。富榮え
 くる人あどハ。已ぐもよまうせても宅地を買とう。或ハ人ふ譲り。又賣り
 なきバ賣あどもせり。他一まふもとをバ。大うきハこきも勢ひよ
 やうせき小まうきて。何處へも將りやう。半とぞねば。さるハ公卿よ
 里あめくハ。世の代る時あどハ。さるびた人もあるき。バ。いと流落ること
 なきもあり。やう勢ひのすあはうて。ハ。いとあもよろじによあき。ぐ
 べき。バ。おのづくさあ。ハ。なまう。しと。まつて婦人あどハ。さあ
 が。あ。浮き。湯。ひて。所縁。かつた。つかぬ人の妻。かう。數。も。あう。と。尺
 も。う。と。が。や。降。夕。教。あ。み。き。あ。小。て。ち。よ。べ。さて。又。い。と。上。古。よ。ハ。氏。姓
 の。系。を。け。ふ。す。き。セ。一。ア。リ。た。う。く。バ。皇后。よ。立。き。ハ。大。き。室。す。の

系。小。お。そ。一。ま。う。く。後。小。ハ。や。う。う。ろ。ひ。く。大。臣。の。御。女。を。く。も。皇后
 小。立。す。す。も。り。で。た。皇。子。な。ど。産。を。う。ま。バ。侍。外。戚。ぐ。も。そ。の。ゆ
 や。う。う。よ。つ。た。て。上。あ。た。位。ふ。も。昇。ア。と。あ。ど。一。み。い。さ。く。ね。公。卿。の。御。女。を。ち
 も。女。御。更。衣。よ。掛。か。う。み。く。室。ふ。う。ま。う。き。バ。同。ド。く。御。戚。檢。の
 ひ。で。く。る。ア。う。一。び。じ。ま。も。く。自。心。女。を。り。う。た。う。び。じ。に。て。う。あ。仕。り
 出。一。ま。ん。と。せ。れ。く。當時。な。う。り。あ。り。き。相。處。女。の。御。父。接
 察。大。砌。の。き。こ。き。き。や。う。明。石。入。道。の。か。く。れ。よ。ら。い。つ。あ。り
 す。お。と。は。り。く。か。べ。こ。き。も。今。世。よ。ハ。を。も。く。か。つ。た。う。り。あ。き。ば。
 い。お。ひ。の。お。あ。み。う。ど。も。お。や。さ。く。又。夫。婦。の。な。う。い。あ。ど。の。う。と。
 上。古。よ。う。れ。な。う。よ。て。こ。ど。よ。う。る。縁。小。の。き。あ。せ。く。これ。ハ。妻。が。れ。
 側。室。な。ど。き。り。や。う。に。く。を。つ。く。み。う。ぶ。さ。ざ。う。き。よ。く。ハ。た。う。じ。ま。く。
 な。き。バ。生。た。人の。ゆ。へ。本。妻。と。お。だ。た。人の。二。人。ま。でも。く。も。あ。く。

妻とも妾ともちもきぬ數ひあつて。夫のたゞりあつ。これ
今世のうへざの婚禮はあへいへく矣あり。そのあくやうをうへ
いそぞおぬゆき化へすとももやへく。因どびとそまづりをし
づ上下のみあるじども相偶ひそよつてれがふ。女あどあつとす。
そようぶつけぬをやうて。そよそゆめをよ。おれよ。あ。なごを考へ
多ばよ。あ。かどもやく。つみじくらふうのへるふ。ひよハキとげ
ひよがくひりひより。又媒ナガキをよみこてもふをよきとねふ。ひよハキとげ
かうひをめ。ほよハあくよ女のきへめて住みどもさうと。女父母がど
あゆても。よだがの半あきバ。初ハちとをがほしておすとおだ。後ハととの
婿小對面する數シもあり。或ハまく。や男の。いようのりぬをば。せり出もとやぐそ
制シテもあり。又いとよかまくるよハ。や女よみのぬすななどをくへてう
せうどもさうとあり。さきびみをおくるぞうりせ半ハ。たゞくほのつむ

ともあく。そのおれうへなどあめで。うきび。ならくのせドくひひもや
して。葱アマぐるとなう。は。帝ミカトは。奏覽タマラフする。の機マジ集シテ。の
おども。作老アラフのスモとあく。かれどがどもと。ふべ。がく。なう。ち
なしづ。またよハ。安オモリ外ホカ。ある。半ハ。じり。と。くめ。まど。と。ま。と。も。名分を
そそく。ひさヒコト。ある。妻妾ヒメシヤク。と。り。ふ。も。あ。く。ひ。ば。た。く。の。す。ハ。い。じ。た
曲事ヒコトと。ハ。お。わ。り。ぬ。さ。ぬ。な。じ。く。お。た。く。ざ。た。か。け。し。ぶ。す。く。て。い。と。く。下。ぎ。ぬ
よ。ハ。さ。て。と。く。さ。ぬ。ぐ。な。る。も。あ。り。く。め。今。世。の。う。へ。ざ。の。婚。禮。と。り。
う。き。の。小。め。あ。き。且。か。の。國。北。後。世。の。理。學。れ。論。お。ど。す。あ。く。ひ。く。る。い。よ。う。考。され
ば。い。とも。く。ら。ひ。よ。く。ぬ。半。の。み。ゆ。く。彼。が。い。そ。ゆ。る。淫。奔。の。風。を。よ。瀟。て。上。下。
お。く。あ。く。不。義。あ。く。ぬ。ハ。な。く。と。と。い。ま。然。き。ど。も。これ。ハ。今。世。う。へ。て。ま。る
牛。お。く。か。ひ。く。べ。て。あ。く。め。そ。世。よ。ハ。こ。れ。す。か。く。ら。や。世。の。夫。婦。の。道。な
ア。く。う。ば。誰。一。人。ひ。ざ。く。あ。り。ま。と。ハ。な。う。り。く。が。く。り。ひ。て。も。往。今。の。俗。

ハあやへそ。いひとく人ふれおわきだりなむる。かの夏虫に水を擣
せうごひうて。なまらぬまと足すて踏むをやふあざう。されども又男女のあ
うみの正一うちしゆ。今のもあくまづめくめく。男女つゆよひめんを
とりすすへあく。止事をほむへあくのあくわむ。躊躇ノハ貴子わづよ
のがせば。やく親したも簾を隔てる。ふ几帳をとてそべ。或ハ障子を隔
てる。ねどもあどりあひても。行あきまくはだりもとびうたるよとおりづり。
兄弟なども異腹ある。なまらぬじやうふて。おりよ面モモテをえむとゆく。
りやをのくよ今世のあまをアキヘンよハ。何くらさん。いとぞうづは
く恥をあらぬ風俗ナラシとて。いとせのあくさくを駆ひあやへふべくとぞ。
わづくハカウトとて。平せのあくさくを駆ひあやへふべくとぞ。
わづく。我宣國ミクニハ氏姓ヤガネのすぢを重くする國俗ミヅなまきバ。男女の縁も。あすう
よ生うたれしき事へうづひするハ。ふまらぬ事なまきバ。いと不妾アシガなまきバとく。

あやへくやうへうづひする考の女などと。牛馬人の側よとづくらうがど
ハ昔ハをくへたうりへゆく。又事理をめくしも。男ぞまづ女のあふ通ひ
て妻ツチドヒ問なまきことふて。凡もかくぬ女を。先男の家ふむくもくも。う
うへなまくと。さればからく。小も。親迎などりとまぎの足へるハ。がくづく
けりとまをなまくと。すべて男女のまちへ。がくす相處アヒヌテてあひづく
て。とくづくあきば。すもかくぬくを。おやまくのむかく。あみぐらふりを
きく。打すまみすなど。天地のおづくから。とめうあくねば。ちの
せよハをくじかくべ。又媒トカタといふのと。やまとみのまくろん。れまよなど。よく
えかる女房などと。せもぬのいひよくくぬく。などつまくと。志の
せもぬよくいひよくする本なりしハ。人のふとやがくぬときとく。せ
いもだ。あづと名ふ人の媒して。やまと嚴オコツくふいひむすぶゆふ。
一のうづひある。男も女もふたをのねとひとたるよあると。おひ

うべて考ふべし。たゞそのみのまゝハ財の事とやらせども。ちとぞうぬ女をあふがち
小めきるゝもあふはあへだ。相手の事は。落童の中のふをとくもよつて。ふよつて
朱雀院の事は。秋ね中をかひひうけまへる事かどもと見て然へ。やがふ
みづくれの事などへ附りふか。こ見事のぞくくなまで。どもとも
情をさうだらう。ありしへ。うちれすいわくよ咎めうかと
などもなうて。すううきくとよく。こもくはあくらふなよびるる
半分あるとどく人の妻妾と定まる女を。おとこちく奪ひほんむらうの
王じもぐくへよくべて。皇國のなまひれまくわをかくべ。大うきくね
の本どもハ、今それまへりく遠へる本あくらふ。やつね事ハ、こま
をえきて。我國ハ禮儀もあくね夷狄のふぢと。らひいあまで。それが
わくらうのうりをはくなかひくみて。國をあくたまうれ矣あるこ
とをえもくね。きひづくとりだべ。その中かまよいつ。天下

御制度(ミサタメ)などへ。我皇國のあくらべ皆からうのうりを摸さきてよると。
又この男女はあくらひのまへあくらう。さゆと摸へきらこうかに
うど。移ふはあくれなきも。あく年。又今せの御制度は。たゞ孝德
天皇のゆを下すりあへば。我國がほの御制度あくらと。又今夫婦は
空あへ。からうの禮はあくらゆのかくらと。どひ無よべ。わりよ
あへたるのもひきうきと。そく又辭あくまよいとば。こくよハ省きう。と
此の法をよむ人のりつもくらうむよどもハ。が不よりとよよいづくめ死
得て。うごづくべ。然ほ氏の源氏外傳よいづく。也じとや代よく
やると。後世トテアラとハお達のうじう。やせよハ治世ヲ争本とぞども。
そのせれ凶事どもをえあつて。一不よ出づねる記をかきバ。治世の
なたやう。又戦國の記をかきバ。朝々軍あらていそげたやうあれども。

世間通用の事本からて、却て隙あるものといつて。深氏も一生好んで
のんぢやうよとせらるども。さあつてへ人の文もなうべからば。
古の事と見るふは、まことにやうじうらうべ。といつて。まことうると
なまくらうよかげつ。おのまことひつゝ。ちのまこともとよじふへんたべ
きやうあり。それまづ國史も、律令格式の書がん。たらうじうにゆると
バ用意して記し。又の人にゆむむる法などをのみ。記をもとたうれば。
こゑとよみ。何事もいさゞへゆきて。さうめぐれに滞りかく。行まれる
ことのやうなおがゆると。お後さうぬもやせくのうちとけのね所が
じくさんまきば。おわひのかふとくのうどりのうき。さる像どもを彼此よ
う考へて。やませのあくをあを推てかくべ。すぐてちるのまこと所く
学問もとくへ。むゆとく時をのうやうを考へて。今をよもく
用みて。益あくのどもを。かんおもむきば。がくざうふさんハリ。づかる

ことよふ漢學もとく人あどかのまれ經書とりかねをのみ。事かくあひ
て。彼國ハ何のむ。すべてうべくへきひく國のとくあると。うべ
あくげ云うたまうがくをとくば。ひくあやへくうたまう本もとく。
かの經書より法令教訓のまふいへるやうあると。こくめぐく行ふるるこ
とふ。まよつきかたぬりいとく知き。そくよぶおもつ小道理を考え
あふ。中ふれぬぢうへく。情あたかうがく。がくも起きじき。はよ多
く。ちううう。まよび何をのすをほん。ひくふれぬとくよ近む
とくかく。人情のあくを。あくとくひもく。で。やせのまぬをよし。じ
中昔のがくれあると。をかくふ。此の廢がくはふとく。うたまうを。彼
へいたす。でもかく。もく。やせのまうを考ふべ。これまん学問のむす
とあくがく。半引うる。

此物也称卷の本)

喬注アキナノツキともいづまの抄アシマす。此ハ乃ハ舊古來称卷之事。といふ條ありて。むり
トヲウムホウムの卷カムを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
ばぞうの事ハシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
様ハシマの事ハシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
引ハシマ。よむぐ人のあるとく。小様ハシマ。アシマのねほす。ものの中ハシマ。アシマ
もとす。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
トハシマヒミタギ。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
おどろく。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
ちあく。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
たゞ。何ハシマもアシマはねほのためをあらひ。ふをいまとアシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
やうかのう。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。

お宿アシマ。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
文句アシマのめでたし。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
秋アシマ。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
さあせでアシマ。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
虫アシマ。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
一アシマやうかのう。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
など。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
ようもめでたし。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
せのへれキアシマ。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
のから。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。
かる。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。アシマを記す。

がへへ。はなびのいわゆるおあくび。おおほよハ。ちよくへき
くまくまぞのへるかな。ひきくもくもくよしむすあへり。
くかうあじき。従ふうて。むうひくんびとくよそ。だう人の怪め。
やうとうする。まよひよかうへり。今。やくみだかもう。うぶを
あみあじとせやう。よもぐて。おのの中ぶ。めぐへ。おどらへく。
えさむやうのすばをもとだ。ちづれよつとくむく。よがつ
ねのたゞ。あるまの。四。やうたるすらばのうらへ。ひとせせたる
なまく。もとむかう。がゆくか。うむとふたづ。また
ほじた。やうへくのうだ。やう。おももく。すどかく。あぶともや
よしけぬ。をよみとて。きうすくと。あまへうふなむ。と。あじ
まく。ハ。うだ。うせ。みづふ。だ。ふ。も。も。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
あづたすみて。年月を。よれども。かく。も。も。ひ。じ。じ。じ。

ち。も。て。よ。み。く。ま。く。ま。く。ま。く。ま。く。ま。く。ま。く。ま。
も。り。す。じ。く。ま。く。ま。く。ま。く。ま。く。ま。く。ま。く。ま。く。ま。
か。ま。く。ま。く。ま。く。ま。く。ま。く。ま。く。ま。く。ま。く。ま。く。ま。
る。や。う。に。く。く。れ。う。ち。か。か。く。み。く。を。あ。く。う。ハ。い。す。じ.
り。あ。う。漢。文。や。も。よ。か。く。ま。く。う。と。い。が。く。今。そ。の。ゆ。ふ。を。安。あ。よ。浮
文。よ。ま。ご。て。て。よ。と。よ。お。あ。た。う。ふ。か。の。く。ぐ。な。ど。は。じ。く。委
く。
ど。ふ。義。を。含。く。く。上。の。も。の。あ。お。ど。ん。字。の。外。小。字。を。あ。る。ど。
う。で。め。で。く。
な。く。の。み。を。せ。り。や。う。に。り。ひ。く。つ。と。あ。と。く。だ。して。い。と。あ。り。う。あ。お。か。が。
お。本。ハ。引。ひ。う。あ。お。ど。ん。牌。史。小。説。あ。り。と。起。よ。も。く。よ。か。く。す。
か。く。く。だ。う。を。あ。げ。づ。ら。あ。と。よ。り。う。

なまうり。こきくわざのやうにあかう。あまの文もあつてますなまうり。
皆と本のさわやかさとみせんとうて、いとこわざのたまうねむ。
おあほのとあへへめでてたはまふなう。おまじばくおぬのとく。
浮えかわきれるゆふがまのわんとすじゆゑく。がふもやまとく。
ういすへ今。やくさんかも比類ありまふたん。

此の書の文

玉小柿よ云す。すべておぬのあかす。伊勢おぬなどとのば。おひく。古すを
もば。おたがきをば。作りのあくふよすりとねや。ま。よろ
ぎ。中かばらもりとどりうるもあ。そのおはなしに作りおぬじも。大
きくおはまきら。おきふばは氏のあたなるハ。みれ作りのよ
るなまう。おきふはをきく。おとせ。みよろへにゆふ。すゞれくま
や。おきふ。おハ源氏あるよりハ。挾衣ぞよろへとりくもあま。

御くど。さざるものも。やうれちあはれどもの。おふくづれバ。おふくずれ
くよふくよきど。源氏のくわまきあるとく。ゆく。とく。よきある。
こまもあれ。詳あく成。近^ナせのあくみども。うけめぬも多くあく。
ややかやかとひ。こまくとふとふと。お居のうとくへたる。
やうふくもあく。おうじとひがてと。おまかへおぬのゆある。おどもの
まみ。一の件ありく。ハ代葉あとの件とく。おうじとひがてと。所もあま。
ちうたうと。おまき集の件をすくへて。おむをいじ。おまきのやうよだ。
おまきおお方う集れ。おべあど。ばとくとく。夙。夙。あうあ。どりお敷の手す
おほとく。おまきとく。ハ。今。俗の。おまきとく。おまき。おまき。
おまきとく。おまきとく。おまきとく。おまきとく。おまきとく。おまきとく。
私説をたえんとて。さる説をもりあす。おまきとく。おまきとく。おまきとく。
おまきとく。おまきとく。おまきとく。おまきとく。おまきとく。おまきとく。

りもあくね味をもあふむとさうのねうふをとびらよひひたす。
妾よ評だるかそあきはれとおはねほの哥ちだら一の件あふれ
る。えまひじめによあふごして、たゞうあるけり。後のをあふるあつきす
なきあか。まとみだるあつて、なぐや人のモ手がくにわうのへるあれ。
わらの件一とくそおかるにせんとなく。とく中ゆも巧あると隊
あくべ。つひあくねまでまくすよわひのもあづ。又ゆの一つ片件といふ
も。こゝのとあふりて。お後の文が更下にとれて。ひざきあきくとよされ
るを。よおつしの。お集じゆよ。一首でとすかちてとまると。ハ。おづく
差うけて。一の件あるやうふらをゆたむじと。ヨト。ふらゆた件
あるふらいば。あるはくら。一やうよろひくと。と。稱するををまく。
つまらやくふらひあくめまく。とおぢたなくら。りくらす。

りへすぐてれまくもあらべく。又作すめの。おふらうく。うら
や。そもらひをよべ。さて又本居翁の。きけねほのとあべ。中ちの比れ
おのをよき。いとよく学びとくれ。わかて。やくまおまく。おぞくく
まかうあど。うそてあじあふ。かと見て。がとく。うねやうふのとく
をそど。よく。味をひ考ふまび。がふよくうへと。それる所。あつて。古人の
うようあくの。きぶて近寄よ。よたうと。とりふをまく。ひ。一やあ
した半を考へて。わのあくまくぬ人の耳よ。げうへとつねきて。がふ
わ。がふきとくじの。まよて。あき。夷小牛と。て。學びの古のすに
仰さんよ。今俗の耳ふハ疎うも。と。わあき。バ。もうがくうに。あふい
き。あんハ。やくいすへの。件。小を。たるべ。かくやうの。ハ。れいとも。も。り
き。まゆき。と。け。お。信よ。あづる。まよあ。がれ。ば。ふ。ハ。畧。まつ。安安氏が

皆あせ論ふもいづく。お便のうち。お旅あづびよ河ども。万葉古久伊勢力
のさくわ井とくあざの古体をもなきく。ちよむおじくかて。やまくらふ
やまくら。おとく。吾國の風流をほくれ。ばくらんをくはすを
さくらむ。おとくやまとさかみの上あたひのなす。とりくわくのう
お便のすむども。よくとくめしる人の海へ。洋もなるかくあんきる。また又
玉小桜云。お便。源氏もととじみて。よだ人とくらる人の本へ。行ゆも
あでく見せよ。小やめくふ。そのよみきるおおは。わめくる。お一つも
なくして。らぐ人の他。すれよにありせて。おへり。だやうふいふ事の。
とくかくふくらむ。おハジ。お便の中れ人の尋ハ。みみまし。或教くづく
トキ。おなまき。ばむれ。ばき。ぼきよなむ。あそく。くま。くら。くら。くら。
きく。おの。卑下。おもひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。

おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。

おうておうと古今事よりこのをよひだすあるふ。さればおう
おどもハ。やかむけよいやーにあがひのゆきふはあらむ。されば士、の
おとおれづつて、中のふすう上せあれんのふちにまことのあれを中
をもあへで、ハシのねきなうは今のかへて、ぞきこまつたあんじあ
よハ。このお傳をかくふかわるて、いふへのと、めがともかくするのと
少くはさぬされりて、やのんせくみゆきをもあへざるをふまゆ
うねうとれくあると、お傳を以まふよくなきぬれ。源氏物語を
じゆうて、よたてのうだりとくあひて、みやびるくよまざりひく。
まのううとおまひくうちをやくのお傳をかへざとくふ。とくふ
あわせふたましのくわうちをこまつにかくも。又そのうすれきゆの
きをぬ。そりのねややくす。やむにかたがくわうじせ半どもまで。雅ミミ
く。それきをうば。今のおれをまへふやうじぞくへあれば。いふ人の

おの出ある。おの音をみるがよもよれて、おのの音。おのの時よ出
きて、おのをうれよと人かくらへ。おのくあるおとやうふ。くまくま
きやがぞう。おのゆふよ此お傳がちるおども。おののちくまんぞ
も。ことくくおよむきくらがくへりかくらそはお傳をつむふよ
て。お体お筋の中おののせ中かたつておよむとたは。おのづく古のまび
やうかる情のうつうて。俗のくれ情とおもふがよむうて。おのと月夜をえ
くる鏡も。こよあくあれぬりべ。おの近きをのへハ。古のまをあひ
とふをきど。なぐのをあひて。おのうべのうべ。おのうべ
いはまうせくよむあふ。古よとげひく鄙。一げあることのくわくらでくる
ぞかくとくといめかす。こよく實よむれくを。およむ人のむかす
あきやかやき。事の因ふり出る。おのよはくるやうふやうと。おのを
よきよみれ。おのをとておべ。おのとこの腰をもすかくのひごとをりて。

なづくあるおあひど。くづく一ヶ月バニハ暗キ。すのとすじがぬをもゆ
るきのゆより出で。悉く毎へりとをむべ。

作者の用意は半
スシ

此家セ浦ム云。凡オ徳とも小脩ラム。大丈セムカニキ年ニテ有んあらム。
まつてセヨシハ大和リウツイリとも稱アミベ。シテトヨリ源氏御後を
論する人。半ド著式部が英才をのみ称して。其實德をいそざわば。御法内
キテモアハキゲニ。式部がトアヨアハビナムアリ。為章つゝくあ候と
む。また日記と似よみて。其事事を記メ。や半と小修
人もなく。才徳萬備の慶暦たり。先、あ候のうへて。ひくつかうをいふ。
紫上のらしくあやしくあるねく。かもやうすくて用さかく。御前之上は
かくにねく。さくさく。花ちる里のりのゆきみをば。着盡のきよしたのあ
やまちとくひて。もやく入らへまく。朝那の母院はあく名をこします。

あづくのうれをよへくのけまうとのぐき。総角の毛代父兄の達戒を
守りしるがと。おのの婦德を記し。持よまくよ。あくあり。体あくびすく
實ならをす。あらやく警戒をもす。あく。あく。あらやくあた
てなうといへども。これむへ。お候よすがりて。あづくからこそとあく
さざれバ。よむ。もき。化のまえやうにのおりへき。とくべ本人の欲辞ハ。
偃師がユミあきと体あく。うるが。とくべ。とくべ。此未嘗日記をりりとくべ。
ゆく。本也。あく。玉小桜小云。是式部がるをへ。お候とがの日記とまとめて考ふ
る。小女の学問をして。はく。とくべ。とくべ。ばい。アド。かく。み。とくべ。
もく。よまく。よまく。とくべ。とくべ。用き。とくべ。所。とくべ。とくべ。とくべ。
て男も女も。もくべ。のくべ。とくべ。とくべ。とくべ。とくべ。とくべ。とくべ。とくべ。
とくべ。とくべ。とくべ。とくべ。とくべ。とくべ。とくべ。とくべ。とくべ。とくべ。とくべ。

みかもとすととがのんよもよばーとひるは.女とておじうつる。お
きとよりよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよ
ひく.うづくほるふあたへととをあせること國ふ.もうせのむすめ
本を.式部曲がゆくと.あらわすと.あらわすと.あらわすと.
あらわすと.あらわすと.あらわすと.あらわすと.あらわすと.
あらわすと.あらわすと.あらわすと.あらわすと.あらわすと.
あらわすと.あらわすと.あらわすと.あらわすと.あらわすと.
よだ學察の爲め.すいとひおりひどと.すいとあやへびとある。
一書あぐ.こどととくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
りゆドヘリのむかと.あらはよのん人せなへひきびて.うどどと.ちのうね
くまくますがのうと.ば.ほよめでくよれを.かりひなむんとすと.
なと.みづくと.か.学問と.ね.あざ.かつて.うへよへね.ぬよ.の

半どもあらば.ふくらむのゆうたらまくひよどくみる.と.よく.
お説どもふくらむる.お説のゆくらんのゆく.スやく.ふくら
よたあらば.あらば.ほく.く.ゆく.ゆく.ゆく.ゆく.ゆく.ゆく.
こよハ.詳.ぎ.だ.そ.の.傳.と.に.ゆく.あ.ら.ひ.と.あ.ら.ひ.と.あ.ら.ひ.と.作.者.お
やゆきのゆく.ゆく.ゆく.ゆく.ゆく.ゆく.ゆく.ゆく.ゆく.

物語のひだへ并ねのあられをかること.と.本

お小梯.お.大.う.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.
お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.
お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.
お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.
せ.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.
お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.
お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.お.

物をばらうるふにてほくひる。とりまとのあらは黨をふ源氏もとひづる
やうのねらのゆれ回答のゆに、ひとあくもあへられくらは。おも様よ、玉
て。かきをほきくれど、こもかくとふよに考へて、けりめのふとさすがふ
かくと、がふくめんへせんかんくわくは。このあへにさすへがのまこととて
あきぐ。おがからぐべし。言葉は小様の従をまごへてほせむ。ば今も荀子。
さて又ねらのゆよよだあへたなどいふも。よのつみせ儒佛の書ふる善惡
是非とふ因どうど。てぐ人の情よよへ。とらかうふて、おのじのきをかき
とうとう。あくぬをあへとへる。小様ふくもへとくもされば、必づる
び。この本れすらをかきば。お陰だても、やほきくもどくをちるふよ
な。・實ふこのねれあそれをかきといひのねきがくのむひとある本ハ。この
本居先生がぞもへてたゞ。まくへ説述らまするふて、いともくらきよ
めでて。考ふなんきうる。また小様の二本をハ。たゞおのあそれのまと

の解トキのべらまつて。今そ後を引めてほさんよ。ハ。いとく事もくわるとして。
其シムホ要とあるふと挿て、ほくらふかげ。まくへがきをとてかだ。
まくその説がゆよ。あそれといひ言ひがきとくとく。ばそれ、かくるねきとお
かく半ぶらの説ナガキでゆる歎息のゆふて。今ヨコトの俗言も。あへといひ。それといひ
是く。あへば口化をえて、めぐで。あへるすなはぢや。とをよじればれなど
りよ。あきれといひと。せあへとそれとのまあくふるゆふて。薄文小鳴呼が。ある
り。もと。あへとよももをあへ。とじくもあへるハ。いよごも。いよごのあへ。およ
めでてあへとひづる。古今もがくとくを。それといひとふをも。ゆよ
るがくふ。今ヨコトの俗言も。やうるとた。かくへ伊勢かくづうの方も。がく。
ゆくらぬに。まじめに。あへきといひと歎息のまくと。のくらぬ。がく。がくの従
がくで。ほくらふ。小様よ。ハ。いよふ。おもふ。感ぜづて。半小あくづて。おも
べきふと。あくく感ぜづれか。おもふをもくと。がく。感ぜ

ざれやうすきてむ。ふうどうだめざつてみたを。ゆのあつれあづどりひ。
もあたへとほりまかのよたまくへありへ。萬ばくへまつたハおのづくせ
でハえあへねこぢなうる。まわぬハ。何ともぞひやくらもくと。おのづ
感せざざくらはあづく。此お便は。ほよぐの萬ばくべたるのがう
を。チカバかにあくまへ。おそれとぞきののこ。ちづかやけやく
ね。うろきでいふかがうりほうに。又春日夏秋をもくの花
を。ほきよきと。やくにあくまくがじくしみれ人のふくう
ごう。おとせとらへゆる。ゆうて。およやかとある時々。およやかのうた本学
のうも。うきをのよむくまくとある。うきと。まきまきは。おとせと今、まく
ちから考へのうも。業ぶ式教がなき。とくがくふゆのうとせとく。成むひと。
まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。
して。あくびるがいからひあらて。かくふみもく。まくは。まくは
のまくも。あらかくようねうみて。やまのすぢふくつて。かくふく

あくなるうふあぐれやうだ。うきかまきば。よハ深くさひきつて。うのよ
きがくふやひをぐくして。群りふ。まくびにすらもほくと。上の件より出
る。まくのうどもを考へゆつてある。まくを。おとせのうどもを。まくふ。
まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。
まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。
まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。
まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。
まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。
まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。まくは。

形式部とあひくやうのあつたがんへれどもいぢくを讀むと、くくくく
 ひくく。又おほの中よきとよにあまき人のまこといふのむちもととく
 考へられば、あらうのゆきとよきとよにあまき人のまこといふのむちもととく
 ちくうる時のゆきとよきとよにあまき人のまこといふのむちもととく
 やうだ人間の心をよきとよにあまき人のまこといふのむちもととく
 のくまくまで、いとよきとよにあまき人のまこといふのむちもととく
 やす。人情世態かよく通せんと。然おほとよじふあまきのあじとぞもば
 やす。已上、廣道云。この論はまことにかうして、せうめのまこといふととく
 くくうびとく。とくよつて、いとよきとよにあまきのまこといふととく
 とすくまくと書籍がある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
 事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
 事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
 事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
 理よ。一あてうあへんととくよつて、まことにあまきのまこといふととく

りうち古のじうのゆきとよきとよにあまきのまこといふととく
 とすくまくと書籍がある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
 事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
 事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
 事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
 事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
 固ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
 事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
 家をもかもも失ふかのまこといふとよきとよにあまき人のまこといふ
 事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
 事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
 事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
 ナヨロヅ

書籍ともを後だ。一そよみで一巻のかひあんと。騒ひなづれべし。がふ
そめうれあらどよハ。又其あはよの印。御印。世間の便。たるべき事。何をうか」と
いひへ。そ君ある。吉日は印。世間の便。たるべき事。何をうか」と
いひへ。と向う。深氏。おほと答へ。もじる。とぞ。かく。からう。も
本ども。や心ひきへうへん。とまつ。わいと。もまわいと。もあいど。そ
まもまく。別表より。べ。さて。又。小柳。よみ。人の情。愁。ざま。と。およ
まる。はた。されば。おのあれは。かく。ちのび。ざむ。は。はふ。こひよ
まく。と。代。よ。き。れ。す。か。よ。そ。す。ら。そ。よ。あ。と。種。ふ。わ。り。く。
ら。か。く。す。じ。き。く。と。お。の。欲。み。そ。き。う。つ。く。と。今。の。せ。れ。簇。ふ。ぐ。く。う
と。あ。う。よ。い。る。キ。と。き。む。す。ら。も。も。う。が。き。く。く。と。お。の。づ。く。く。れ。半。す。と。
人の。情。愁。ざま。と。お。の。せ。れ。と。お。の。せ。れ。と。お。の。せ。れ。と。お。の。せ。れ。と。お。の。せ。れ。
か。う。に。半。む。と。か。う。か。う。か。う。か。う。か。う。か。う。か。う。か。う。か。う。

きつた。こよも。ある。こよも。か。か。よ。人の。おれ。お。ざ。す。ら。ハ。ね。ほ。る
意。の。中。に。や。う。か。う。か。う。か。う。か。て。此。お。け。ハ。よ。の。中。れ。お。の。お。れ。の。う。う
を。お。あ。つ。そ。て。よ。も。く。は。ゆ。く。憲。ぜ。あ。ん。と。作。ま。る。お。か。く。ふ。せ。き。の。す
ぢ。あ。で。ば。べ。の。情。れ。さ。ア。ぐ。と。こ。か。う。た。る。と。さ。あ。お。の。あ。れ。の。す。じ。き
て。除。き。と。う。れ。味。ハ。う。く。く。う。く。く。う。く。く。う。く。く。う。く。く。う。く。く。う。く。く。う。
お。う。て。お。さ。る。の。お。の。ふ。ほ。ま。と。な。と。や。う。お。ふ。か。と。う。べ。ふ。あ。ふ
き。あ。る。類。を。い。も。く。こ。よ。や。う。と。き。う。と。か。の。あ。き。と。き
と。お。せ。う。う。後。の。う。な。れ。ど。後。本。二。位。の。意。を。び。ハ。人。も。く。ん。も。な。く。く
ま。す。お。の。あ。い。れ。し。れ。よ。す。ぐ。ち。かる。と。あ。る。す。ぐ。お。伝。の。を。す。ふ。あ。や。れ
ふ。や。と。これ。な。う。う。や。が。さ。る。の。日。お。ひ。く。へ。と。お。ど。う。も。う。あ。く。べ。タ。ま。を。な。ど
あ。る。ま。か。と。お。そ。の。お。れ。あ。そ。れ。の。お。れ。と。お。そ。の。お。れ。と。お。そ。の。お。れ。

すぢよつけて、ハナるヤハジルあやまちももじりで、アヒムラハトモするふる
まひす。おのづくら、うちましるヨリがふく。源氏、おののうへよて、ヤマ院、おのの本。
御月夜、ゑのく。藤壺、中もみのすあざめのぞく。おのゆ、ももさやうの、
ヨリのくらみがちたるすぢふハ、ハトキハカのあくまきあくむすあるが、
あとさへふきあくね、おともせやく。やあひづのからだ、いれを、おを
くらみのくらみ。とくもきく。お次よみみすども、^{アヒムラハト}お誂も、^{アヒムラハト}お笑
くらみ。そもく、おあごりす、ハーモ。今俗の、くもそハ、^{アヒムラハト}おもろ、淫奔、放蕩
不義非禮の事を、^{アヒムラハト}おもひて、とらふめど。そきハ、^{アヒムラハト}儒佛の
義、お耳も、^{アヒムラハト}おうらひあへるかの、下とあれ。实小男女のなうへひを。
天地の作れおのづくら、^{アヒムラハト}おきへるを、^{アヒムラハト}おふ人の力にて禁む
べきわがわとあいび。また、^{アヒムラハト}おのづくら、おのきあくねもあいびる
ハ、^{アヒムラハト}おもろて、おもふ子孫を、^{アヒムラハト}おもろりて、^{アヒムラハト}おもろりて、^{アヒムラハト}おも

おも。おもさばうりひく。おもうべ。おもうすうりて、おもおこうり。
おもおこりともなるべきあいび。おもくおもきを、おもく。おもやけより
やう偶^{タチ}おもやうを、おも並^{タタキ}おもよきを、おもく。おもやけより
あひぐひやく所の規則なり。おもば梅枝^{シモバ}を、^{アヒムラハト}おもく。おもく。おもく。
おもおなじふも。おもくみて、おもくみて、おもくみて、^{アヒムラハト}おもく。おもく。おもく。
人^{ヒト}のを、おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。法令のまことじであて、^{アヒムラハト}カの
教誡のまこと。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。
とくあつて、真情のまことにかくわめて、おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。
して、おもく。情のひく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。
おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。
おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。

うひがことなるよ。又玉小様は委く無へらまされバ。彼すをもて教へし。
至論のあはれよ云々かのあもきをとせんと化するお便を。お説ふう
なほも。あとへ花をさんとく極めうる様の本底。伐タキぐとて薪タキ
あらう。薪タキハ一口もすそハもあへば。きらなる。おおきに
そよやうに。薪タキよに本どものわらふあすくある。お
はり。様をまつとくハ。がくよんある。あらう。とぞりふべき。あは
り。儒佛の教とく。もじきうりうて。とある。おの。うきをまつと
り。と。おひらをたゞ。身をまわ。かきも國をも詣もびき。道ふ
もやう。ねばたこ。人のおやれみをやめよ。ちきく。あれとらひも
バ。不孝のふはよ。ある。ま。く。民のりつに。奴ヤクのほし。もと。あれと思ひ
あんよ。不仁の思ハ。ある。ヤジ。と。不仁あり。不不孝ある。すもよ。小
あす。りひも。ゆけ。バの。あもきを。あら。おばぞり。されば物モノハ

おの。うもまくと。えせる。あもき。とり。うと。うと。うと。うと。うと。
して見る時ハ。おのづく。戒誡。よたる。べと。と。よ。う。げ。小。や。う。と。お.
う。う。き。を。ち。じ。め。す。り。お。戒。誡。の。ま。ぞ。と。く。じ。く。く。よ。く。の。ね
ぎ。と。あ。ひ。ぞ。あ。あ。び。き。と。い。れ。く。う。れ。す。い。う。ぎ。と。福。小。て。く。ま。で
の。ち。う。さ。く。ど。も。ふ。う。け。と。も。い。れ。ぬ。本。う。る。代。此。お。お。お
ま。う。ふ。て。い。と。お。む。く。め。ぐ。う。が。う。よ。つ。け。と。も。玉。小。様。ハ。此。お。お
の。注。教。ど。お。中。よ。一。ま。へ。お。け。ゆ。る。ま。た。る。を。か。べ。

一 部大半とり半

紫家七論。一部大事と標レルる條。ありて。りそく。冷泉院の御半。或
は。く。う。お。傳。な。り。ふ。く。お。法。ま。ま。た。う。き。と。い。ひ。或。そ。子。細。あ。ま。と。
あ。ま。う。小。き。を。私。し。或。は。此。趣。向。の。見。か。く。た。よ。て。一。般。の。お。法。と。う。て。ご。ふ。く
ま。不。一。う。う。と。や。と。も。う。も。ゆ。う。と。の。小。紫。式。教。が。キ。を。と。あ。ま。る。

カのとりべー。為章試小今案をもつて。識考の是非をまちけべし。
 とて。相臺灣より次。彦毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
 の手を漏どて。伊勢地傍よニ條底。後撰集よ京極伊恩所。宋元和傳よ
 花山院。こまくのひうびんをせねもうべー。私の神きことふあび
 まくらなうべー。されどほんじひうてかのキラギれをせば。えがる。
 とて。からう比楚の毛毛晋の元帝などが手を引ゆく。これ他のふ
 け半よそそくやううぞ。いそんや朝廷ハ空作のさづけさせぬひより
 かく。万世一系さくふまぎれまくとありりの。するのをふも女房
 更衣のうちへいだせやもうくぬうちす。帝系のまぎれもどり
 めべしやとまくねむひもくわ一派家をかく。式神ハ女あきども。そ
 生質の美と孚字向のちうとくらあひく。識見わのづく大儒のき
 よひくとリふべー。又薰火ねのむハ天道好還の理をもつて

おりむた。羅大經が事と小回ド。羅大經が事と上。晋帝を漏する。鶴林玉露の文めすあるを今ハそがたう。がまをうべし。此一件が
 一般の大半よつて。謙びる人の立場あるべきする。といひ。まよ。或問とま
 けく答へく。云る事の半に。皇胤け一代よも。左原氏あさはら氏うじがふやだ
 きあんハ。吉園よし園そのの内うち爲めのうたす。東海とうかいをあむ魯仲連ろ仲連じゆありぬ
 べー。また。藤原とう原はら源氏みなの。冷泉院れいせんをうこまふ。跡あとあるまづだ
 らやまちうて。源氏みなの忍重しのぶと。りとども。宮胤みやのまぎれありもど
 なりうてあくべ。相臺灣あわれけあよハ。正ただく子こなり孫まごあり。神武天皇の
 血脉けみゃく。伊勢宗廟いせモ祀まつをうけまひ。天下の蒼生あおうじやうとども
 うむをうべー。と。まくす。御法象院ご象院じやうの。傳後つい後ごをすく。朱雀院しゆを。心こころ移うつへ
 きまう。いとも難むずき。華はなあくびや。ともく。一旦人倫じんりんの乱おあると。長く
 宮胤みやのまぎれと。うまく。うまく。うまく。源氏みなの忍しのぶをもぐる。もぐる。もぐる。宮胤みやのおも
 といども。臣下しんかをもぐる。源氏みなの忍しのぶをもぐる。もぐる。もぐる。

もねうくあくねをよろこびべし。式部が主家却てもくらべし。さうりふ用を
やうれん式部が當時宮中ふも披瀬す。おほよ。わななくしてす。べしや。
お作云諷諭よもつをまひく。いうめく。まのまきれとあくう。じめふせ。
せうかべ。ようせざばう。うごめく。たすけのねべーえ。と。ねくもく
論トモきぐく諷諭とぞうす。御多と玉小柿よ。又こまく諷諭とぞ。冷泉院
のあむまきれを諷諭ふとうて。一級の大車こととて。そのうと諷諭ども。
な不儒者ごくうすて。ひくすくありうてのふとども。例少のまじめく。
お後のこうるをあくごるのそ。その論はゆよ。源氏君と藤圭吉中止れ
あくまを。もくめよハレともやまへにまふうだ。終りよハレとおもしく
きくまぐれあやまちなり。とととくくる。氣象をよとといひて。ちひ
て諷諭ふせんとく。れども。さんかも藤圭吉を引てしゆどく。源氏君
御車を。後よひとおもく。あゆめうり。御車とあくひまく。絶

かうぐ。その後もなべ御月夜。たよ多びく。きくひく。ほくまうりもん。
り。若葉。やえの御車を。いとねくらへん。あくまくらかう。とととと
る。あくべ。その後よかく。すをまく。ふき。べ。り。と。も。と。諷諭あ
む。一きびかいき。あぐ。えきうつ。すまく。ふぞたう。ねづ。
又みをつく。のまく。あ代のかく位。おうみひ。ひめ。とくと。おひの
ごとく。わ。とおや。注。ま。ハ源氏。君のお。せ。下。お代。と。冷泉院北
御車。」かの御車。ごくな。よ。ハ。源氏。君。冷泉院の御車。下。御車
きくまく。つれて。ハ。い。よ。く。わ。く。ら。く。く。ら。く。て。皇胤の。よ。だ。も。じ。め。く。の。と
お。欲。き。く。よ。く。あ。よ。と。お。べ。き。ま。が。や。う。よ。シ。ひ。の。ご。と。う。き。と。も。が。だ。ま
ど。く。ま。く。き。か。の。う。な。ほ。この。お。ね。ま。の。う。き。の。か。お。後。ど。も。あ。く。ね。こ。と
お。ま。く。じ。ど。も。が。く。れ。す。む。じ。れ。車。た。ま。く。ば。く。く。お。お。手。へ。も。じ。つ。が。ふ。く。ふ
お。は。車。う。れ。と。諷諭。と。い。が。れ。ふ。も。あ。く。じ。も。く。け。お。や。う。ぎ。れ。ハ。古。今。

〇九

えりあつてありやかに。おのれをもへ人のをもよのじるわうだりかへば。そ
のあはれをもひそむ。つひよへあらわとたまつある。おもとひそひといひ。おは
れまくのひよそ。此の傳は源氏もの事とせり。かんとすらふ。人の
せらふをもすらふ。まづは事の由にす。執政大臣とひどき。おどく
あくおどくちひるがふ。ちと天皇のきの号をかくす。おんとすらふ。さる
づきよりかくせばやくすかくして。まのとふ清きくわづかめくわづか
帝のけ父とせんねふ。此の御のまづれは。おほゆめ。此君。帝は
かすみて。臣と大臣と。臣はすかひきふく。帝のけ父とまくもく
をもとよ。太上天皇はすかひきふく。がくくくくめぐくく
おのまづれ。おのまづれ。おのまづれ。おのまづれ。おのまづれ
あくへ。おのまづれ。おのまづれ。おのまづれ。おのまづれ。おのまづれ
おのまづれ。おのまづれ。おのまづれ。おのまづれ。おのまづれ。おのまづれ

ゆくらの太半と仰る。とぞおれをねむる。院坐のまゝ。いは
ををまづかじめうきゆくのゆく。すてうりてよつてぬのふやかり出
せんが。おひわのきのきよは。あひうきへはつとも。何のひいゆる。
佛天のほげあるがよつて。奉一筋をす。まことに。まことに。まことに。
かくそ奉つて。とせきひめして。みうじは僧のこまつる。かくよつて。
くよちです。おまうら。後のおまでれもうんをべうちうくまをきく。
うあはは。又僧のやせる。天変もまくふかく。せゆあづらあくね。
とくまく。うかくを次の文よし。いよいよがくめんをさせせひつて。
一世の源氏。又納言大臣。よあひて後がさくよみこかめなり。位あもつき
きく。もありて例あり。うかく。くわがく。くわく。くわく。くわく。
くわく。くわく。くわく。くわく。秋のつまく。よ。太政大臣。あら

おづきと。注あり。もしも。おのまざれのす。さんぐ。か来るより
つまく。うかく。くわく。うりよつて。源氏。もをく位ふつけ。もくと。お
め。よづく。とく。くわく。くわく。次第のわから。くわく。考ふだ。
さて。おのの弟もをくらめて。すもと。お。ば。今。一とき。くわく。あて。お
の。序位。お。は。お。ぎ。を。た。上。天。官。か。て。や。く。お。く。と。は。う。ゆ。の。序
公。を。ほ。ま。し。う。り。の。そ。ハ。挾。衣。お。序。か。う。お。大。ね。を。つ。ひ。よ。お。か。く。る。
おのの源氏。も。と。ま。ひ。く。今。一。き。も。す。ま。め。て。ま。る。か。の。あ。く。え。か。れ
大。將。も。帝。の。位。よ。つ。け。ま。よ。り。て。何。と。う。や。ま。く。と。は。く。う。と。め。た
て。そ。の。よ。れ。く。が。く。お。演。も。う。お。す。や。ま。と。紫。式。教。ハ。と。く。は。よ。く。お.
く。う。か。の。お。く。お。れ。は。位。を。ぞ。の。う。て。太。上。天。官。も。そ。の。よ。ー。か。く。て。ハ
く。う。か。の。お。く。お。れ。は。位。を。ぞ。の。う。て。太。上。天。官。も。そ。の。よ。ー。か。く。て。ハ
お。う。か。の。お。く。お。れ。は。位。を。ぞ。の。う。て。太。上。天。官。も。そ。の。よ。ー。か。く。て。ハ
お。う。か。の。お。く。お。れ。は。位。を。ぞ。の。う。て。太。上。天。官。も。そ。の。よ。ー。か。く。て。ハ

みづきうわする事やあふ。とち、とようすまざまをまづけ
れきて。げゆのまざれをうて。かくいだる号を號りて。はうあむぬ
さあよたれて。ゆきく。彦をまづて。は位よつたをまじとひく。ふ。
此の頃が。あ院の古をが。おほくの御子の古申に。どうどきて。た
が。かくあぐ。位をめぐとおりんと。体ば。わが。よし。だあり。
う。ほうそめのくわへ。及ばぬき。ふとのが。うけんと。あふ。こき
帝の法位。よのが。うきよびだ。あき。と。の。一。き。を。そ。こ。や。く。ふ。の。
さう。と。り。ほ。ほ。く。ゆ。の。下。を。ら。く。せ。る。間。か。し。く。く。か。く。に。傳。
ざ。あ。く。た。う。と。け。か。め。ま。ま。き。を。う。な。く。る。と。く。姓。源。氏。も。の。業。え。を。き
と。も。も。ん。め。そ。と。り。か。と。上。件。の。あ。り。む。き。じ。か。を。か。む。く。て。あ。る。べ。
な。や。う。も。が。獲。名。ハ。お。や。う。と。何。ま。う。け。お。伝。を。ま。び。じ。く。す。う。づ
半。の。ま。ま。を。う。て。ち。る。や。に。大。將。の。女。ま。ま。ふ。あ。の。び。て。を。ま。う。て。う。み

お。つ。ゆ。す。を。お。づ。れ。あ。ん。の。ま。ま。ふ。ま。う。て。ま。ま。う。つ。て。ほ。ふ。の。ゆ。
を。あ。う。ふ。ま。そ。ま。ん。と。り。か。め。あ。は。る。時。天。恩。大。傳。の。は。告。ふ。よ。う。て。
ほ。ひ。よ。お。お。成。位。よ。つ。け。く。ま。う。が。お。う。じ。次。院。の。ね。が。ま。ま。き。を。
ま。び。び。く。あ。る。あ。う。る。と。ま。ま。も。う。れ。大。將。を。位。よ。ほ。け。く。業。も。と。き
も。や。ん。あ。ん。あ。ま。と。お。あ。ざ。う。と。同。ド。仰。う。ね。の。ま。ま。と。バ。れ。と
も。も。こ。れ。を。な。ず。へ。ち。う。ま。く。已上。少。指。と。り。それ。く。う。せ。二。つ。の。傳。り。ば。き
よ。う。く。よ。び。ゆ。め。の。ま。ま。思。く。本。も。も。不。後。よ。う。が。ま。ま。や。く。て。と。
さ。く。ふ。い。よ。び。よ。く。あ。れ。か。の。く。既。ふ。か。る。傳。ど。も。れ。せ。め。う。へ。ハ。く。ふ
も。も。向。く。で。お。の。ま。づ。と。あ。も。の。を。も。ひ。く。う。ふ。記。つ。べ。と。ま。と。ば。二。つ。の
論。の。ま。う。ふ。お。れ。ハ。ま。づ。と。安。藤。氏。の。い。つ。う。う。や。ま。う。う。う。と。そ。や。が。や。る。
さ。う。そ。か。の。セ。論。の。う。た。ざ。あ。ハ。小。様。よ。り。それ。ま。づ。と。今。く。儒。者。さ。す
て。海。翁。の。例。を。も。も。て。傳。ド。う。ゆ。め。よ。ハ。あ。ま。と。伝。め。の。あ。み。を。ま。

ひきう諷諭めんとするもあへふとおぢやるよトもあるべだなす。
その處ハ此の後アフタてはかくのねねも字シテど。帝の御妻メイサウ小内ミナミ
小内ミナミをありて、やくせくようすみすくあをと。御位ノヘイよりそなへて
かうどりくまハ。迄アヘンてもく。大うちやね後アフタてああくバズと。近アラシいのちよ候
もきうじトすくまバズ。しきの後アフタて車の情コロをあへて審オモす。往リに
の左せシテたよす。左義シテともあへまかよ流布シラフしてある。かの日記ヨ
あくまでもハ。わざくハ。アセされえがまくられハ。さてをもくハ。見
て流布シラフよ。ほりよアモも宮后モウカニも御マサニがくめづら
かりもすらカ。ひきうと。近アラシいもさだハ。近アラシいからう
のアラシ。他タク一氏チシキのをといひハ。りべと。おれよあざへてもすのアラシ。で
そ。こハ伊園イガミ。祚代ツヅキよりさうハ。たきハ。ときのみハ。時すトいかけハ。
やまくまくハ。まのをせねハ。とハ。なきうのをばハ。きとひ嵯峨スザニ。天皇

よ准ナラヘ醍醐タケツモ天皇チヌヒ小據ヨシツへハ。あつてハるもあず。時のハうどれハ。先祖シムセハ。
むくの犯ヒカルさくシテらあくハ。いきこハ。也深カナの制サタシ度ダシありハ。セキハ。
俗ハもよくハ。わからハくなんハづくハ。きハハ。各タチめシよハ。の半ハ
あくハ。もハ。めハ。とハ。ほりよハ。帝シムカニもハ。もくろんハ。がくハあくハ。も
半ハ。もハ。わく用ハ。きうハ。のハ。まハ。だハ。かハ。もくよハ。わくハ。
のハ。也ハ。もくハ。とハ。おハ。とハ。ひひハ。けハ。とハ。大ハ。一條サツのハ。諷諭ハ
てマサニかハ。かハ。の相サミ本ハ。物ハ。まハ。されハ。よハ。きハ。くハ。やハ。被ハ。を。あハ。とハ。
とハ。もハ。むハ。とハ。行ハ。まハ。てハ。佛ハ。説ハ。よハ。よハ。因シム累シテを觀面ハ。よハ。くハ。も
なハ。もハ。とハ。いハ。かハ。くハ。てハ。深ハ。きハ。もハ。とハ。アハ。人ハ。情ハ。よハ。よハ
よハ。もハ。とハ。あハ。けハ。とハ。かハ。とハ。人ハ。情ハ。よハ。よハ
よハ。もハ。とハ。やハ。とハ。やハ。とハ。がハ。てハ。被ハ。めハ。のハ。をハ。とハ。女ハ。議論ハ。きハ。たト

ほあるなり。なむかしも。此草ハ相毒矣。ふをのへ来るも此れゆ。やう
が、やへ日の下とてあらはる。伏案のたゞ、やうと見ゆるふ。のみにつと對へ
まゆるも、此草ハ、やねのまゆられのす。ねがへりの中、ほじりとあゆゆふ。
そゆゆるすとも、ば、皆くきとおもひへばんじやう。あやなしるゆのやう
よえぐんゆめ。さういふと、おもひへば、草本のまへ、作うねーのきもあうーまことくん
おだやか。そく、いわゆるをうるよう。今宵よハ、かきづいたるかくは
あひて、いもんハ、うみだぬをうきだ。おのきもえの海も、さうめう。よく
えんじょく見てよへる。かくやくふらる時、小柿の花
ハ、かくして、かくへふ毎へひむ。まづ源氏、おもつと後よひとぞ
くくあるまへとおひあらうゆきあがく。やほもあや、御用おもよ
おびくまきひへゆきいとひきこくる。かくもく、まよと
よむむむなきと。あれすまつち情を、やうて、おのあひをもむとく。

物語がゆの件^{アタ}よりて、あるす、だよとおひもあつひたゞ。あやか
ゆくよむきのうせうゆきひて、のどかにべくよひきくを続あよきハ。こよしをきてハ、論
ぎべうむ。安藤氏のりへゆく。けふもつゆく。むちある、傳者をとすへよ。ハ
おもくへある。あべくやひく。どあるの、をきて。諷諭といふ。今世
あくねとなれば。そきを辯へらまく。まひととおうなれど。かくひつあ
て、よもよも議論とよびきをあひてやう。すべて諷諭とりかのハ。
その事とちへめて、ひや諷諭のごとくよハあへで、とて、作うねーの花
唐ふのす和くよひき。ハ。こよかくからく。そのまよハ、もうちあつむ。
いの実の例たゞとひて、いふべくよれ。が、ちうづくへとほひ
よ跡あるがとあへバ。諷諭とりづくもあへど。こそひにさせんくもの、よ
じかゆき。ハ。本物のくよとよがく。たゞ、かくあんならば。さうぬ
やうながくへ。おひきをあひて、ひや諷諭のなれし。おひきば、今とあつてハ。

りよへる事あれば。やまとをめとすの事ぢうとひて。せうめの
もとおしてからやとらんぞ。この祖孫といふとの事ぢうたうも。あ
まじもハ。お傳のゆふ假りのをそいつるにひどく。こゝへこ
念を考ふ。たゞあくまでもあるとかくはなれど。こゝへ
こゝよがくまよハあくまう。おまじめがまきよ。お傳のゆ
つとくよがくまよハあくまう。おまじめがまきよ。お傳のゆ
よだちあくまよハあくまう。おまじめがまきよ。お傳のゆ
る年。後れをもじつて。おまじめがまきよ。お傳のゆ
りひやきよ。おまじめがまきよ。お傳のゆ
ば。こゝよがくまよハ。おまじめがまきよ。お傳のゆ
のかく位よがくまよハ。おまじめがまきよ。お傳のゆ
引ひよがくまよ。おまじめがまきよ。お傳のゆ

がくびたをのむとまくるたまき。お傳よすべに年よハあくま。又官胤の
おまじめをとくに詮たまくるたまき。おまじめがまきよ。お傳の
かくまよ。おまじめがまきよ。お傳のゆ
諷諭と勸善懲惡とは。やまとちをあくまうと。おまじ
けくまよ。おまじめがまきよ。おまじめがまきよ。お傳のゆ
をくまよ。おまじめがまきよ。細くまよ。おまじめがまきよ。お傳のゆ
さるを中の大を。一つの大をとつてせうめ。とひまき
くるもひく。おまじめがまきよ。お傳のゆ
かくまよ。おまじめがまきよ。お傳のゆ
くるもひく。おまじめがまきよ。お傳のゆ
くるもひく。おまじめがまきよ。お傳のゆ
のゆ

たりの儒者をかのあかれど此作アリ。さうほ筆をとる人知らずも
 あくまでも文法がども浮文的なる所ありておぞ一ねはとひよな
 がもうかかれておへど。おなじふ彼よなぐるふ、あらかじめとお
 そじとおきめぐるやある。おきめどこれ、がの誠体のうふひうきひ
 らかあるへど。とかく小僧アキシありぬあれば、ちひていつぐもあくまど。さて又
 あくまく、さうあれがちなるあひづのあよハ、ほよ今一きハあくま
 ゆうじである。およこむつてよしとしまく。ハ、ヨシテうさる
 こくよ御内侍。本がふよるびたかがく皇胤のまごれぬぢう
 きのうをしむ。おきめどもおのあくまど。いそ
 あんとおよ此あくびのうふ一もかまく。おふくあくまの
 よかく。たゞいそ。字はのまくなど。があるや。本のうづ
 きだかまく。種ど。がおみれのきちなると、いとくよもうて

閣やう成り。おみれのうづりは。おふくよ。上あたはう。のうへ
 で。おはくや。のひよく。はく。て。おせんも。や。そ。く。な。ん。お。て。ま。
 源氏君の。常。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。
 い。よ。ぎ。や。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。
 と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。
 お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。
 料。か。な。ど。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。
 の先例を。か。ん。ゲ。く。せ。き。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。
 て。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。く。と。お。か。
 う。
 い。う。

牛のかまべへや。いきよへひだる。人なきもどて。かくもあはりへみ
あもじまへびひよへて。まよもあるよ。かく。まのまにみをかんとく。
執政大臣たゞふちほへつと。そのかんやうふて。まよのまもみとふす
やべきもと。何のあくねとくはあくん。ト。やまのゆ位ふのびりとくを
ふうけよても。かくあるまへにかゆのゆなしごも。おがうさくびき
やくふふくもあくべ。あるばかくおもろしに本のあくく。太上
天皇のまよすかくへや。ひうたかく。ハ。子細あるべき牛なり。

さてまよ落とすふ。板居の儀式せうを帝へ奉するふの儀式もとにて。
そろ号かくかくしめすくん料ととひ代アカレとせられる。ハ。ごふく料とは
タケモヒキと。これよりて。ハ。御をきいめくらゆの料のとハ尺え
だ。御生バヤシを酒をきく。ゆのゆ。牛文のと。ハ。米をやう。
わのれが考へかの美よひひく。まよ件の後を弁ふと。かくべし。一儀と

すべて源氏のまよをかくもみの料と。とひ代と。おがう
よへや。源氏のまよをかくへ。落とすふて。何のまみをゆの
まくかく。かく。あかうて。おのまくかく。まよ。牛文のとをばく。
さて太上天皇ふ准へすかすと。ひいをひよ。一條院へ行幸のとある。これ
ぞ家くのまくかく。かく。まよ。所と。とく。や次の毛革。まよ。
牛の皮がまよ。かく。まよ。牛の皮がく。ハ。桶木のわせす。され。伏案よ
て。表よむふぬ。あもく。おもく。衰へぐもと。かく。べし。さき
よす。女三官のと。ひでたて。つひよ葉。毛すき。かく。右衛門。督うせす。ひ。
落とすふの本ある。まで。ば。源氏のまよをかく。あまの牛のとあれ。ば。
よした。うれまよ。あくべ。さて。ほひよ。伊佐美。ふ。此を上のかく。経へる。
こよ。迦夜のまよ。ある。幻。そハ。のうか。ひのう。おととく。れしき。

すべて源氏君がうへよ。筆をえぢうりとかんと擇へるふがあらむる筆とある
を。す。源氏君の筆をえぢうりをあらむとあらむことよく
を。バもあらむて。此ふ上かキモをあらむ。筆本のくじうわことよく
のくじうわをあらむがくじうわすあらと。かくあらじうわともかくは。まか
うれ物のままで。されば報應を示さるやのなまび。さてつひよ源氏君の口あせ
紫とハ。夕方、太白のうづふとぞめ。相葉帝の詔書も。朱雀院の詔書のうづよ
す。致仕太白のまハ。紅拂たまふとぞめ。安養氏がじつまく。けり
めの用をあらじうわをうべ。ちてまくちと上天官を下てやみゆくと。
作アシナの御くわをつける。ものとく。被衣のすをほたるふや。や
といとまつても。相葉帝のお人のすも。房をまく。墨をのすも。竹ひも
きくらうがでくかて。ほももひづだらうか。但一ことをもく。筆をと
きとおもふのとたるやうふをれする。だくつかうげづ。又いは。被衣

を。ひて。がの方舟を信ふつけ。半よたずへて。筆をきらかん。もん
あくとをもき。とやうよひもき。あらむ。いふと。がふかのあはく。せあはく。成
うつむのひて。やひをとらひる。筆を傳かれど。がのちねをつひよ位み
ほす。す。も。おき。い。を。看。き。す。と。る。ば。う。め。の。こ。は。ま。う。に。よ
あく。ざ。や。そ。も。く。氏。姓。を。賜。り。ま。し。く。御。臣。と。ま。う。ま。る。す。れ。ち。く。ま
ま。そ。一。と。び。氏。姓。を。継。ひ。て。ち。か。と。び。皇。子。と。か。く。て。大。御。位。を。嗣。ぎ
づ。ハ。あ。ぬ。と。や。う。な。き。を。い。く。も。上。つ。代。よ。ハ。治。て。あ。れ。う。か。く。る
を。後。か。さ。る。例。の。出。す。へ。さ。る。ば。れ。皇。子。す。こ。ち。の。お。も。う。ま。う。で。や。む。と
か。ほ。う。が。う。一。時。の。伝。か。う。と。や。例。を。例。と。と。い。う。き。ぬ。か。よ。伝。ふ。ば
ね。う。う。ぶ。み。お。れ。が。う。か。く。き。や。う。や。あ。る。お。も。う。も。ま。や。か。ぬ
空。よ。ま。の。か。う。ま。る。あ。り。く。お。伝。よ。つ。を。え。ま。す。す。な。ど。あ。ば。それ
ト。く。は。傳。ふ。ト。や。う。と。と。か。へ。ま。ん。よ。ハ。れ。く。ま。う。め。よ。う。

せんへあべばうべつくるも。天照大御神のほとうひあらんとす。穀良の作者アリスミとあるが、ありて、大御神のは告やうつて、うねを侍位よつけしるハ、がまいとくまびきことくさりふて、おねほの玉をの手。又冷泉院の法後をくわらくるなど、かく内に、ときざゆとこちがゆうかね。さきどかくやうの手どもハ、せはくめのわれとこす。あくままで、誰うその實をかうじたなましバ。セ論も、小様も、なまりづく論かちく。今かく辯へりあつとも、おとぎ内に、かくうごとくちきば。おとぎうきことも、おとぎうきこりがく。後の江戸人のがぢきらふまじうね。さてま此論どもをみて、かく安藤氏が説をがふとむりとあんよがの眞諦のうをなわもいさんとぞ。おぼうみの傳をせば、の手を引きて、試よ論する。數々くさんかも、さんとやまとそれハ、ひとひざとあきびきふるがくことあれ。

そもく我皇國のなづりへとひかへる見ゆあらふ。いづれの由本あんむても、けげとあくまで、やまくね牛をりふ。うけともあくねととくと、後をふりうてハ、はあくりひちきす。数々生あハ、ちからう。いぬのたゞくと、みうつむかふて、がくもくかくと、かうかうせば、かく、此うへの手と、いづれと、かくする推量のうとも、をりそんとす。がく。後道らもいとまくひづれをがくてのまくわく。かく大御神がうの声がひじかふらうひゆうかのとがへん。かくさざあたるをなりひそとよ。但、ねふよとしなどとてりす。さう例あくわあきば。この傳うめのとあくびふれやまうばうと、手のつりやあげつぐ。おきば子烟あつて、本なかさんとおひらくあまべし。されし。

